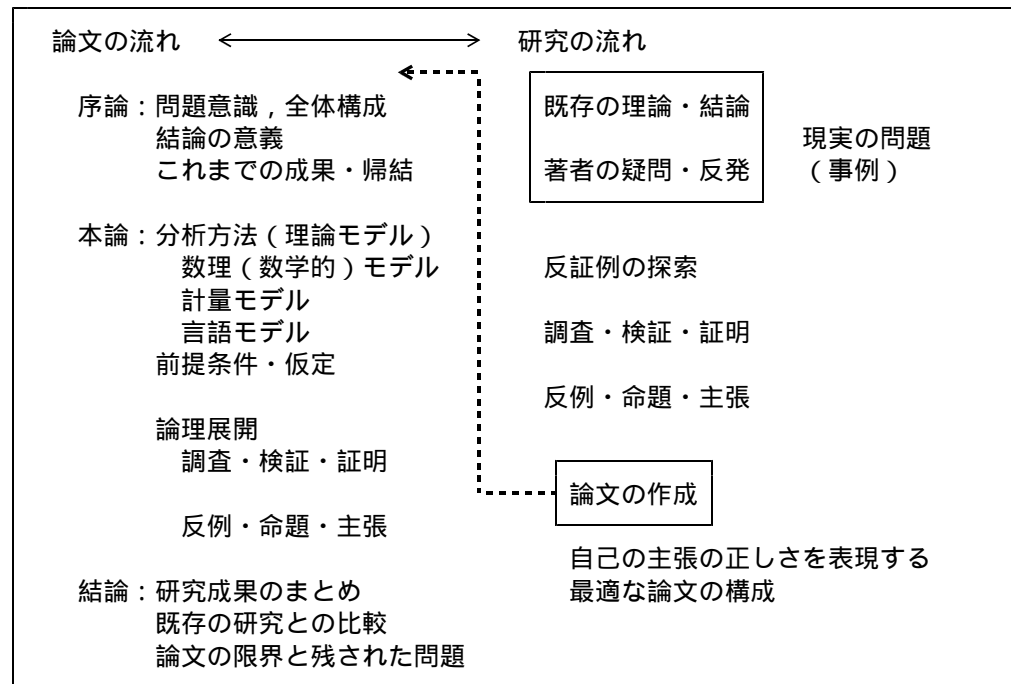


卒業論文の書き方・簡略版

須賀晃一

- 論文の流れ・研究の流れ
- 研究と論文作成は基本的に異なる2つの作業である。



研究の流れ・論文の流れをつくる際には次の点に注意しよう。

- そのテーマを選んだ動機・問題意識を鮮明にする。
- 自分なりの結論・主張を明確にする。
とりあえずの結論は何か？
この結論の正しさはどうすれば主張できるか？
- 結論を導くための手法・技法（モデル）を決める。
- 各章・各節の暫定的結論の関連を考える。
- 論文全体の結論を導く。
- 各章・各節の内容上の相互関連に気をつける。
全体の関連を示すフローチャートの作成

研究の進め方

- 1 テーマ設定の方法

卒業論文では、一般に自分の好きなテーマを選んでよいから、テーマは簡単に見つけれられると思われがちだが、実はこのテーマ設定という作業はそれほど単純ではない。十分に考えられたテーマでない限り、早晩いつそう越えがたい難問を生み出すであろう。

テーマ設定の順序

- 問題意識・問題関心を確認する。
漠然としたテーマを設定する
- 漠然としたテーマをいくつかの具体的なテーマに分割・変換する。
- 具体的なテーマに対する現在の自分の考えを列挙する。
- 具体的なテーマをグルーピングする。
- 問題の重要性、興味の程度を基準にして選択する。

テーマ設定上の注意

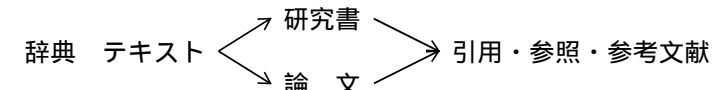
- 興味が持てるテーマであること
- 身近に感じられるテーマであること
- (少なくとも自分にとっては)重要な問題であること

ここで大切なことは、好奇心をかき立てられるほどに興味深いテーマを選ぶことである。

- 2 文献の収集・読解

文献収集上の注意

- 文献の探索・収集のルートを確立する。



- 関連のある文献はすべて拾う。
- 関連のない文献は捨てる。
- 重要文献を見落とさないように、常に欠落文献の補充に心がける。

文献読解上の注意

- 自分なりの読み方を確立する。
下線の引き方、余白の使い方、メモのとり方などを工夫する。
- 部分と全体を同時に見る。
常に部分と全体の関係を念頭に置いて読む。
- 正確に内容・論理を把握する。
- 研究の流れと論文の流れの両方に目配りする。
- どこまで明らかにされたか、残された問題は何かに注目する。

A氏がB氏の結論・主張に異議を唱えているとき、なぜそのようになるのかを、両者の用いた仮定・論理展開・事実認識・データなどを対比させて、明らかにしておかなければならない。自分はどちらの立場に立つのか、あるいはどちらの立場にも立たないのか、その根拠は何かを考えておくべきである。

- 3 個別問題の解決

自分の設定したテーマは、細かく見るといくつもの問題から構成されていることがわかる。それらのうち、未解決の個別問題に解答を与えていく作業が個別研究である。そのような個別研究に関する注意を示しておく。

- テーマを未解決の個別問題群として捉える。
- 各個別問題が既存の方法で解決できないかを考える。
- 適用可能な他の方法はないか探してみる。
- 新しい概念を作って解決の方向を探る。
- 必要な追加的データ・文献を収集する。

- 4 研究成果の位置づけ

個別問題に対する自分なりの解答・結果、さらにその全体としての自分なりの結論が既存の研究とどの点で異なるか、独自性はどこにあるか、なぜそのような結果が得られたか、などを明確に認識しておく必要がある。その際の注意点は次のようになる。

自分の結果の正当性を考える．

- a．仮定・前提条件は受け入れやすいか．
- b．仮定が他の研究より強いかわいいか．
- c．使用したデータは適切か．
- d．結果を導く方法は適切か．
- e．論理の飛躍はないか．

テーマ全体の中での位置づけを考える．

- a．他のサブテーマでの結果と矛盾しないか．
- b．他の箇所での仮定・前提条件と対立しないか．
- c．全体としての結論に占める役割は何か．

既存の他の研究との比較を行なう．

- a．既存研究の結果に包接されないか．
- b．既存研究の結果を特殊ケースとして含むか．
- c．既存研究とは独立か．

．卒業論文の作成

研究は論文作成に先行する．自分の結論が見えないまま論文執筆を始めるとすぐに困難に直面する．一応の研究が終わり、個別問題のそれぞれに自分なりの解答が与えられないうちは、けっして論文作成の作業に入ってはならない．

- 1 全体構成の練り方

研究が終わったからといって、いきなり原稿用紙に向かってもよい卒業論文を書くことはできない．不特定多数の読者を相手として説得的な論文を書かなければならないのだから、十分な準備作業が必要である．最初の準備作業が、相手に自分の結論・主張・意見を受け入れさせるように、論文全体の構成を考えることである．これに関する注意点を挙げておこう．

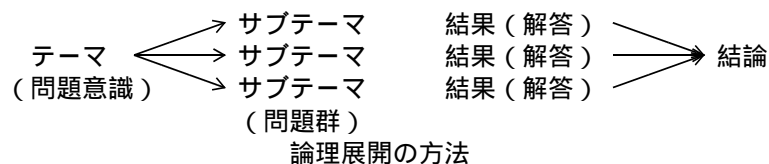
テーマ全体の問題意識を明確にする．

- a．なぜ自分の設定したテーマが重要なのか．
- b．なぜいまそのテーマを扱うのか．
- c．どれだけ広がりのあるテーマか．

全体の結論を明確にする．

- a．自分の導いた結論は何か．
- b．その結論からいえる主張・意見は何か．
- c．結論の一般性はどの程度か．

最適な論理展開の方法を考える．



- 2 章の立て方

全体の構成が練り上がったなら、次の準備作業は章立てを考えることである．サブテーマや個別問題はテーマ全体から見て比重の違いがあるだろう．したがって、全体構成と同時に章立てができ上がるわけではない．章立てを考える際には、次の諸点に注意する

必要がある．

個別問題群 (サブテーマ群) をグルーピングする． **キーワード集を作ろう!**

問題解決方法の類似性、問題の親近性、結果の補完性を考慮して、個別問題群をグルーピングする．その際、同程度のボリュームになるよう配慮する．

各グループの問題を定式化し結果を適切に表現する．

各グループのサブテーマ群を同一の問題として定式化し、対応する結果を適切に表現し直す．

定式化された問題から結果までの論理展開を明示する．

問題から結果までの論理の流れを箇条書きにする．箇条書きにしてみると、論理の違う問題を同一のグループにいれていないかが確認できる．

各グループを1つの章として章題をつける．

問題の定式化から結果までの展開にふさわしいタイトル (章題) をつける．

各章をいくつかの節に分割する．

論理展開の流れの中で自然に分割できるところでいくつかの節に分割する．

必要があれば各節をさらにいくつかの項に分割する．

- 3 文献の利用法

文献の種類

- a．論文の中で直接に利用あるいは言及する文献
引用文献, 参照文献
- b．論文の中で間接的に利用・言及する文献 参考文献
本論の展開とは余り関連を持たないが、テーマに関する重要文献なので、注などで言及する文献
- c．直接的にも間接的にも利用しない文献

文献の配置

- a．自分の結論・主張を補完する文献
- b．自分の結論・主張を対立する文献
- c．必要なデータを提供する文献

- 4 卒業論文執筆上の注意

次のような形式 (オーソドックスな方法) で書く

- a．序論 (Introduction) これを第1章とし、本論を第2章から始めてもよい

問題意識: 卒業論文で解こうとしている問題を提示する．

全体構成: どのような順序で論理を展開するかを示す．

結論の意義: 得られた結論の重要性を解説する．

これまでの成果・帰結:

自分の結論・理論とこれまでの理論・成果との違いを明確にするために、これまでの成果などをサーベイ (展望) する．サーベイが長くなる場合には、まとめて第1章で行うか、関連するそれぞれの章の第1節で行ってもよい．

- b．本論: 第1章

第1節	1. 1	1. 2	...
第2節	1. 1	1. 2	...
...			

第2章

第1節	1. 1	1. 2	...
第2節	1. 1	1. 2	...
...			

- b. 文章中のコンマ，ピリオドの後は1字空ける．ただし，p.123やNo.325のように連続してこそ意味のあるものは続ける．
- c. 単語の省略形やイニシャル等にはピリオドをつける．ただし，慣用として用いられているものは除く．

[例] J. F. Kennedy Kennedy, J. F. Univ. NY NATO

- d. 書名はイタリックで書く．ただし，タイプ書きするときはイタリックの代用としてアンダーラインを用いる．

注の付け方

注の内容からみた種類・利用法

a. 引用注

本文中に他人の文言を利用することで，論旨を補強したり，説得力を上げることができる．論文である限り，そのようなときにはどこから引用したかを絶対に明示しなければならない．引用した文言は「」で囲み，原則的には，本文中の引用文の箇所⁽²⁾等を記し，脚注あるいは章末・論文末の後注に引用文献を明記する．要約して利用したものも，原則としてその都度注で明記する．

b. 出所注

本文中で利用した各種資料の出所は，学術的論文である限り明示しなければならない．原則的には，それらの資料を記載した文章の末尾に注番号⁽³⁾等を記し，論文末の後注に出所文献等を明記する．なお，本文中または注記中の文献名のところで著者名〔発行年〕，もしくは著者名〔文献番号〕の形式で記し，文献目録に通し番号をつける形式もある．

c. 説明注

本文中で，論旨に直接関係はないが，内容の理解を補強させるためにつける．また，論旨がいたずらに複雑になるのを避けるためにも適宜利用される．

文献目録の付け方

引用文献

本文中で引用した文献であり，引用ページまで正確に記す．

参考文献

論文作成に際して，その基礎となるアイディアを提供した文献．

参照文献

本文中の論旨を展開していく上で，直接的にその考えを提供したか，大枠としての資料を提供した文献．参考文献よりは直接的に内容に関連するが，引用文献のように厳密に内容に一致してはいない．原則的には，参照したページ（複数にわたることもある）や章なども記す．

文献目録（文献リスト）

上記 ， ， の各文献を一括したリスト．

文献注は，他者が論文に書かれている内容を追試・再検討する際に参照するものだから，誰が読んでも，どの文献の，どの箇所かが確定できなければならない．そのためには書名，論文名，著者名，巻数，発行年月，出版社名などは，必ず記載しなければならない．

文献注の形式

単行本

- a. その書籍を初めて記載する場合には，以下の形式で記載する．
著者名 + 『 + 書名 + 』 + 出版社名 + 読点 + 発行年 + 読点 + 引用ページ + 句点
[例] 二階堂副包 『現代経済学の数学的方法』岩波書店，1960年，p.192．
- b. 著者が複数の場合，著者名と著者名の間の中グロ（・）を入れる．

[例] 鈴木光男・武藤滋夫 『協力ゲームの理論』東京大学出版会，1985年，p.149．
c. 翻訳書の場合，訳者名 + 訳を著者の後に入れる．

[例] K・J・アロー，長名寛明訳 『社会的選択と個人的評価』日本経済新聞社，1977年，p.94．

d. 書籍が複数巻の一部の場合，当該巻数あるいは巻名を書名の後に入れる．

[例] O・ランゲ，竹浪祥一郎訳 『政治経済学』第 巻，合同出版，1962年，p.57．

e. 当該巻が叢書などの一部の場合，書名の後に 叢書名 ．

[例] 石川経夫 『所得と富』 モダン・エコノミックス 13，岩波書店，1991年，p.51．

f. 編集された書籍の場合，著者名の代わりに編者名 + 編 ．

[例] 小宮隆太郎・奥野正寛・鈴木興太郎編 『日本の産業政策』東京大学出版会，1984年，p.215．

g. 同一の書籍を第2回目以後の注で利用する場合．

i) 同一の書籍の注が連続していない場合．

著者名 + 読点 + 前掲書 + 読点 + ページ + 句点

[例] 二階堂副包（1960年 a），前掲書，p.195．

（注意）同著者の同年の著書が複数ある場合には，（ ）内のように年や a，b，c で区別できるようにしておく．

ii) 同一書籍を連続して記載する場合．

[例] 同書，p.201．

論文・定期刊行物

a. その論文・定期刊行物を初めて記載する場合には以下の形式で記載する．

i) 雑誌論文の場合には以下のように記載する．

著者名 + 「 + 論文名 + 」 + 『 + 雑誌・定期刊行物名 + 』 + 巻数 + 読点 + 号数 + 読点 + 発行年 + 読点 + ページ + 句点

[例] 酒井泰弘 「寡占，情報および厚生」 『筑波大学経済学論集』第20号，1988年，p.23．

奥村宏 「新しい企業像のために」 『世界』1992年2月号，p.29．

ii) 編著書中の論文

論文著者名 + 「 + 論文名 + 」 + 編者名 + 編 + 『 + 書名 + 』 + 出版社名 + 読点 + 発行年 + 読点 + ページ + 句点

[例] 稲田献一 「社会的福祉とは何か」熊谷尚夫編 『経済政策の目標』日本経済新聞社，1972年，p.223．

b. 同一の論文・定期刊行物を第二回目以後の注で利用する場合

i) 同一の論文・定期刊行物の注が連続していない場合は，単行本【 の g の i)】と同じ．

[例] 稲田献一（1972年 a），前掲論文，p.227．

（注意）同著者の同年の論文が複数あるときは，（ ）内のように年や a，b，c で区別できるようにしておく．

ii) 同一の論文・定期刊行物を連続して記載する場合は，単行本【 の g の ii)】と同じ．

[例] 同論文，p.228．

新聞等

『 + 新聞名 + 』 + 発行年月日 + 朝刊・夕刊の別 + 句点

[例] 『日本経済新聞』1992年6月23日朝刊．

[具体例 1]

本文中で

塩野谷祐一による効用概念とは、簡潔に言えば...である⁽²⁾。
ハロッドは次のように述べている。「古典学派の理論の欠点は、.....基づくにすぎない」⁽³⁾。
「.....経験したのである」⁽⁷⁾。

注の中で

(2) 塩野谷祐一『価値理念の構造 - 効用対権利』東洋経済新報社, 1984年, p.39参照。
(3) R・F・ハロッド, 清水幾太郎訳『社会科学の方法』岩波書店, 1969年, p.25。
(7) J・ヒューズ, 角山栄他訳『世界経済史』マグロウヒル好学社, 1977年, p.373。

文献目録で

塩野谷祐一『価値理念の構造 - 効用対権利』東洋経済新報社, 1984年。
R・F・ハロッド, 清水幾太郎訳『社会科学の方法』岩波書店, 1969年。
J・ヒューズ, 角山栄他訳『世界経済史』マグロウヒル好学社, 1977年。

・文献注のその他の形式

引用文献注, 出所文献注のところでは引用文献・出所文献に関する著者名, 著書名, 出版社, 発行年等を完全な形ですべて記載するのではなく, 巻末の文献目録のどれかを指定するような形式。これには, さらに, 巻末文献目録に番号をつけ, その文献目録番号で指定する方法と, 著者名, 発行年, a, b, cなどで指定する方法がある。

[具体例 2]

本文中で

塩野谷祐一 [1984b, 39ページ] による効用概念とは, ...
「古典学派の理論の欠点は,基づくにすぎない。」(ハロッド [1939a, 25ページ])
「.....経験したのである」⁽⁷⁾。

注の中で

(7) J・ヒューズ [1977c], 373ページ。

文献目録で

塩野谷祐一 (1984b) 『価値理念の構造 - 効用対権利』東洋経済新報社
R・F・ハロッド (1969a), 清水幾太郎訳『社会科学の方法』岩波書店。
J・ヒューズ (1977c), 角山栄他訳『世界経済史』マグロウヒル好学社。
(注意) このような形式では, 発行年は概して著者名の直後に付ける。

・文献目録の表記法: 上の [具体例 1] に対応

単行本 (日本語)

K・J・アロー, 長名寛明訳『社会的選択と個人的評価』日本経済新聞社, 1977年。
石川経夫『所得と富』モダン・エコノミックス 13, 岩波書店, 1991年。
小宮隆太郎・奥野正寛・鈴木興太郎編『日本の産業政策』東京大学出版会, 1984年。
鈴木光男・武藤滋夫『協力ゲームの理論』東京大学出版会, 1985年。
二階堂副包『現代経済学の数学的方法』岩波書店, 1960年。
山崎正和『柔らかな個人主義の誕生』中央公論社, 1984年。
O・ランゲ, 竹浪祥一郎訳『政治経済学』第 巻, 合同出版, 1962年。

単行本 (外国語)

Avineri, S., and A. de-Shalit eds., *Communitarianism and Individualism*, New York: Oxford University Press, 1992, pp.53-55.

Bacharach, M., and S. Hurley, eds. *Foundations of Decision Theory* Oxford: Basil Blackwell, 1991, p.55.

Luce, R. D., and H. Raiffa., *Games and Decisions*, New York: Wiley, 1957, p.123.

Murphy, R. F., *Headhunter's Heritage*, New York: University of California Press, 1960.

von Neumann, J., and O. Morgenstern, *Theory of Games and Economic Behavior*, Princeton: Princeton University Press, 1944.

論文 (日本語) - 雑誌論文・論文集(書籍)の中の論文

稲田献一「社会的福祉とは何か」熊谷尚夫編『経済政策の目標』日本経済新聞社, 1972年, pp.195-234。

後藤晃・若杉隆平「技術政策」小宮隆太郎・奥野正寛・鈴木興太郎編『日本の産業政策』東京大学出版会, 1984年, pp.159-180。

奥村宏「新しい企業像のために」『世界』1992年2月号, p.20-31。

酒井泰弘「寡占, 情報および厚生」『筑波大学経済学論集』第20号, 1988年, pp.1-37。

藪下史郎「グローバリゼーション下での経済制度と金融 - 情報の経済学からの考察」『早稲田政治経済学雑誌』第354号, 2004年2月, pp.21-35。

論文 (外国語) 雑誌論文・論文集(書籍)の中の論文

Fishburn, P. C., "Dominance in SSB Utility Theory," *Journal of Economic Theory*, vol.34, pp.130-148.

Machina, M. J., "Dynamic Consistency and Non-expected Utility" Bacharach, M., and S. Hurley, eds. *Foundations of Decision Theory*, Oxford: Basil Blackwell, 1991, p.55.

Sen, A. K., "Social Choice Theory: a Re-examination" *Econometrica*, Vol.45, 1977, pp.53-89.

新聞・辞典 (日本語)

『日本経済新聞』2005年6月23日朝刊。

新聞・辞典 (外国語)

The Times, October 20, 1999.